

伊良部島の活性化と加工品開発の取組み

— やらひーみーっどう、あちゃまい大漁！（やってやるぞ、明日も大漁！） —

伊良部漁業協同組合
青壮年部 部長
伊良波 宏紀

1. 地域の概要

伊良部島は、沖縄島から南西に 270km の位置にあり、東シナ海と太平洋の両方に面している。空港がある隣の宮古島からは、高速船で 15 分の距離にあり、現在宮古島との間に橋を建設中である。人口は 5,781 人（平成 24 年 3 月 31 日住民基本台帳）である。

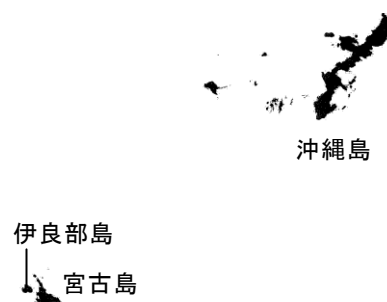
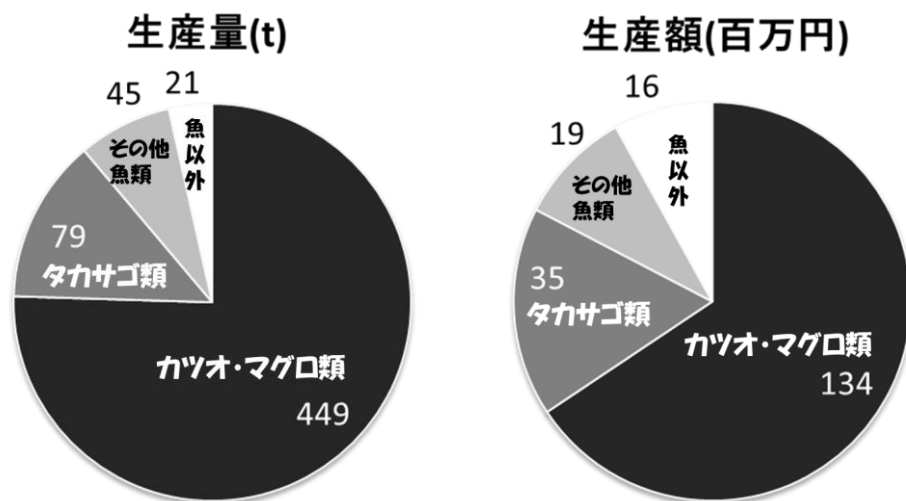


図 1 沖縄県伊良部島の位置

2. 漁業の概要

伊良部漁業協同組合の正組合員は 131 名、准組合員は 377 名である。伊良部島の漁業の中心となる佐良浜地区は、昭和の終わり頃まで南方カツオ漁で栄え、昭和 57 年に浮魚礁（海面に浮かべたブイに回遊魚を集める漁具。通称パヤオ）を設置してからは、日帰りで安定した水揚げができるようになった。漁業種類は、パヤオでの曳き縄漁が最も盛んで、24 隻（5 トン未満）ある。県内に 5 経営体しかないかつお一本釣船が 3 隻（9.9～17 トン）あり、県内のカツオのシェア 8 割を占めている。また、国内で唯一、伝統的な潜水追込漁であるアギヤーを行い、県魚グルクン（タカサゴ類）の県内流通量の 5 割を供給している。そのほか、銛突き、棒受け網などの漁船漁業が盛んで、水揚高は 595t、2 億 363 万円である。



沖縄県宮古農林水産振興センター（未発表）

図 2 平成 24 年伊良部島漁業生産量・生産額

3. 研究グループの組織と運営

伊良部漁業協同組合青壮年部は昭和 59 年 11 月 3 日、部員数 20 名で結成された。昭和 61 年から平成 13 年まで、佐良浜地区の漁民大運動会の運営に携わり、異なる漁業種類の漁民同士の交流を深め、組合員の連帯意識の向上に貢献するなど、地域を大いに盛り上げた。しかし、若手の部員が入らず、メンバーの高年齢化に伴い、平成 18 年からは活動が休止状態となっていた。ところが平成 22 年、組合員から、再び大運動会を実施してほしいという声が出始めた。折しも、かつての青年部員の息子達が U ターンで就漁していたこともあり、8 月 26 日、新しいメンバー 10 名で青壮年部を再結成することになった。

平成 25 年 4 月現在、パヤオ漁業やカツオ船、追込網を中心に 14 名の部員で活動しているが、中には、I ターンで本土から漁業の世界に飛び込んできた若者もいる。

運営・活動資金は、会費の他、漁協や漁協の部会である小型船主会からの助成金、市の漁港清掃事業の請負費等を活用している。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

伊良部島は、昭和の終わり頃までは南方カツオ漁業を中心とした関連産業で栄えたが、近年は人口が減少し、島唯一の高校も廃校の危機を迎えるなど、島の活気が失われつつある。その背景には、島での漁業関連産業の雇用が少ない、という課題がある。

また、離島であるため、島外出荷に時間と輸送賃がかかる。伊良部島の水産物の多くは伊良部島を含む宮古島市内で消費されるが、宮古島市は人口一人あたりの水産物供給量が県内他地区に比べて高く、魚の供給は過剰気味である。しかし、型の大きなマグロを沖縄本島のセリに出そうとしても、夏場は魚価が安く、輸送費を差し引くと市内での価格よりも低くなり、出荷できないこともある。1kg 程度のシビ（小型マグロ）が最も深刻で、夏の晴天時には値がつかないこともあり、休漁せざるを得ない。また、販売力の小さい島の仲買では、マグロのサイズとヤケ（高温等による筋肉中タンパク質の変性）の有無だけで価格を決めざるを得ないため、ヤケ対策以外の鮮度保持の努力が価格に反映されないことも問題である。

これらの課題に対して、青壮年部でできることはないかと考え、取り組みを始めた。

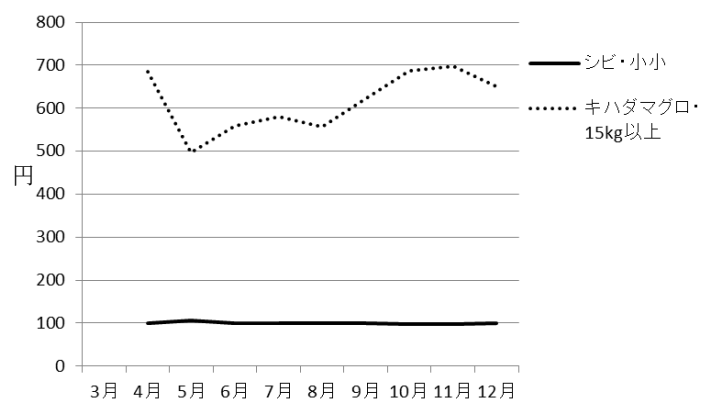


図 3 伊良部漁協平成 25 年マグロ類単価

※「シビ・小小」は値段がついたものの中で最小クラスを示す。夏は 1kg 以下には値段がつかないので、グラフに表れない。

5. 研究・実践活動状況及び成果

1) 伊良部島の活性化：島に活気を取り戻したい！

私達は、島の活気を少しでも取り戻したい、という思いで、これまでに様々な取り組みを行ってきた。

①浜の清掃活動

私達が普段使用している佐良浜漁港は、宮古島へのフェリー乗り場があり、島の顔として最初に人々を迎える場所である。しかし、東西約 1km と広く、これまでなかなか清掃が行き届いていなかった。青壮年部は再結成直後から、港の清掃活動をボランティアで自主的に行っていた。平成 24 年からは市の清掃事業を請け負って、年に 5~6 回清掃を実施し、多いときには 8 トンものゴミを集めている。継続した活動の結果、漁港がきれいになり、観光客にも気持ちよく島に来てもらえるようになった。



図 4 浜の清掃活動

②パヤオの日まつり

伊良部島はパヤオ発祥の地である。毎年、宮古島市にある 3 つの漁協で組織される宮古地区パヤオ管理運営委員会の主催で「パヤオの日まつり」を行っているが、平成 24 年からはパヤオ設置 30 周年を記念して、会場を隣の宮古島から伊良部島へと移した。昨年は約 300 人の来場者があり、地域の祭として定着しはじめている。祭の日は島内外からの客で島が活気づき、パヤオ漁やパヤオで獲れる魚を一般の人に知ってもらうよい機会となっている。青壮年部は企画、準備段階から、全体の運営、漁業体験コーナー、販売などで中心的役割を担っており、青壮年部がいなければ成り立たないイベントである。また、この祭は宮古地区の 3 漁協の重要な交流の場となっている。



図 5 会場設営



図 6 組合長らによるパフォーマンス



図 7 カツオー本釣体験



図 8 パヤオ漁の水揚げ見学

③漁民大運動会の復活

平成 22 年 11 月 27 日、青壮年部の再結成に伴い、9 年ぶりに漁民大運動会が復活した。普段はあまり交流がない小型船主会（パヤオ漁）、カツオ船グループ、アギヤグループ、銚突きグループと一緒に汗を流し、コミュニケーションを図るとともに、漁民の家族を中心に地域住民にも恒例行事として楽しんでもらえるようになった。青壮年部は企画・運営を主体的に行っている。以前青年部の活動停止とともに運動会が中止になったことから見ても、青壮年部はその存続に欠かすことができない存在である。

漁民の“絆”深める／伊良部漁協「復活大運動会」大盛況

伊良部漁業協同組合の漁民大運動会が 27 日、佐良浜中学校グラウンドで開催された。2001 年から中断していた運動会の 9 年ぶり再開とあって漁民たちは大喜び。競走競技などの運動を通して交流を深めた。チーム別応援合戦も繰り広げられて終日大盛況だった。

漁民運動会は漁業者の健康増進と交流を狙いに 1986 年にスタートした。それ以来毎年開催してきたが、漁業に就く若者の減少などで 2001 年から中断されていた。

今年に入って同漁協青壮年部が再結成。これをきっかけに運動会を再開させる機運が高まり、その後の漁協内の話し合いの中で再開が決まった。

9 年ぶりの運動会を祝おうと、グラウンドには大漁旗を掲げて「漁民の祭り」を演出。参加者は業種別に五つのチームを作り、競走競技や応援合戦を繰り広げて久しぶりの運動会を盛り上げた。

競技種目の中にはチーム最重量選手による走高跳をはじめワーガニ回しリレー、アヒルリレーなどユニークな種目が盛りだくさん。ワーガニ回しやアヒル競走では出場者の珍プレーが続出して応援団の笑いを誘っていた。

友利義文組合長は「子どもからお年寄りまで一生懸命になれるのがこの運動会。青壮年部の再結成を機に再開できた運動会を来年以降も継続させ、漁民間の交流を深めていきたい」と話した。

「ワーガニ回し」リレーで競う漁民たち=27 日、佐良浜中グラウンド

宮古毎日新聞
2010 年 11 月 28 日(日)



(<http://www.miyakomainichi.com/2010/11/10714/>より)



図 9 子ども達の宝探し競争



図 10 見る人も楽しいアヒル競争



図 11 地域住民も参加

2) 加工品開発の取組み：夏でも安心して大漁したい！

前述のように、私達には、夏でも休漁することなく、安心して大漁したい、という思いがあった。そこで青壮年部では、シビに加工で付加価値をつけて売ることはできないか、と考え、平成24年から商品開発に向け、何度も話し合いと試作会を実施した。その結果、とりすぎたシビを簡単に加工して、冷凍保存できるもの、という条件を満たすには、ミンチが最も適しているという結論になった。次に、ミンチをいかに売るかについては、商品にレシピ集をつけてみてはどうか、という意見がでたため、一人1品レシピを考案し、みんなで試食を行ったところ、どの料理も好評であった。これで方向性は決まったものの、なかなかすぐ販売には結びつかず、その後は県内外の加工場や漁協を視察し、販売の可能性を模索していった。

平成25年8月15日、漁協にコープおきなわの石原修氏を講師に招いて、商品開発の勉強会を行い、青壮年部の多くのメンバーが参加した。このとき、私達が加工品開発で大事にしたい点について議論され、時間のあるときに加工でき、冷凍保存できること、伊良部島に雇用が生み出せること、維持費がかかる高度加工より簡単な一次加工であること、商品が売れることで島の子ども達に還元できること、の4つがあげられた。

昨年10月には県内の漁協と連携して商品開発を行っている寿味屋（すみや）食品株式会社を訪れ、シビを活用した商品販売の可能性について、意見交換を行うことができた。青壮年部では、このときの意見を元に原料を調達し、試作品を作って頂いた。今後、この試作品に改良を加えて、伊良部島の特色を活かした、島を元気にするような商品を開発していきたい。



図 12 試作品用原料加工



図 13 試作品用原料加工



図 14 漁協での試作品検討会



図 15 水産加工会社との意見交換

6. 波及効果

青壮年部活動の一番の効果は、佐良浜地区全体に活気が生まれたことがあげられる。部として活動することで、個人ではできないような大きな2つのイベントを成功に導くことができた。漁協には元々いくつかの部会があるが、これらのイベントの中には、青壮年部が再結成されたからこそできたこともある。昨年のパヤオまつりでは県外からの観光客も含め、島内外から約300人が訪れ、漁業の島伊良部島をPRすることができた。

また、青壮年部が取り組んできたシビの加工品開発についても、水産加工会社との話し合いが進んでいる。まだ動き始めたばかりで具体的な効果は示せないが、若手漁業者の強い想いを周りにも広げて、橋が開通するまでに何とか成功させたいと考えている。

3つ目の効果は、課題や取り組みたいことについて話し合う機会が増えたことである。様々な業種の仲間と顔を合わせて飲む機会が増え、冗談もまじえながら話すことで、若手漁業者の間で問題意識が共有されるようになった。また、他地区の取組みを視察し、交流することで、相談する仲間ができたことも効果の1つであった。

7. 今後の課題や計画と問題点

- 1) シビの加工品開発と販売：漁協や小型船主会と協力し、安定的に加工して販売するしくみを作る。加工品製造と販売によって雇用を生み出すなど、島に還元できるようにする。
- 2) 漁協の販売力強化：他の水産物についても、漁協が強い販売力を身につけられるよう、漁協経営に積極的に関わる。
- 3) 青壮年部の活動体制：各部員が主体的に考え、活動できる体制を考える。また、新規就漁者を確保し、部を継続させる。